

第71回O先生賞

静かな部屋

大阪
磯川朋美

右の通り贈ることを決定した。

二〇二五年一月

コスモス短歌会



作者略歴

一九七八年 埼玉県秩父郡生まれ
二〇一四年 コスモス短歌会入会
二〇二一年 COCCOONの会参加
二〇二四年 第四十六回評論賞受賞

作者感想

葛の花 踏みしだかれて、色あたらし。この山道を行きし人あり
田舎で育った私は葛が嫌いだった。空地や廃屋や山道にはびこり、毛羽立った茎や葉は肌痛い。高校の国語便覧でこの歌を知ったとき、気にも留めなかったあの鮮やかな赤紫の花がぱっと脳裏に散って、以来、积沼空も葛も心惹かれるものとなった。コスモスに入会して十年、いつかはと憧れたO先生賞に届いたことは望外の喜びです。いつも傍らで励ましてくださる大阪支部、COCCOONの会の皆様をはじめ、全ての仲間深く感謝申し上げます。

静かな部屋

第71回O先生賞受賞作品 大阪 磯川朋美

鶏頭の襷の暗さを許さずに税務署前の寄せ植ゑ二つ

何事か怒鳴る老人のとなりで税金納め礼して帰る

止まらないクシャミのさなかパチパチと星も散るから笑つてしまふ

突然のアウフタクトで始まった夕立それも夏のひと幕

ボウフラに熱湯注ぎ殺すとき魚の解凍せねばと思ふ

チーズ味カールをアテに夫と飲む大阪暮らしも二十年過ぐ

レモン水喉のみどを下り体中霧晴れて血の冴ゆるがごとし

必ずや切られることを思ひつつ大き丸パンじつくりと焼く

健康な脳の輪切りのやうですね研いだ刃物はトマトで試す

知つてゐるやうで知らない奥の歯を抜いて渡されふいに恥づかし

お家では指は組まずに合はせます仏壇拝む光の子よ

スカートかズボンか選ぶその朝を厭はしきものとして娘は

アイロンを掛けつついつも「母さん」と言つてしまふが誰なのだらう

片側に川見つつ行くふるさとの水速くして記憶逆巻く

生臭き夏の河原で爪を切るわれの欠片は行方も知れず

四十年可愛がりてもにこりとも笑ひてくれぬフランス人形

人形に百面相を四十年 夫にも同じく二十一年

川底が近いとみせてこれは屈折 社に持ち帰り検討します

ピーマンの青臭き手を恥ぢながらATMで給与をおろす

欲だけが先走りした注文のラーメン端の一本から食ふ

「殺処分の仕事はキツかった」とふ友と飲む居酒屋の明るさ

ニワトリを何羽も何羽も捕まへてバケツに入れて暑くて怖くて

やがて死が訪れるならそのままに蜂が巣作る室外機のファン

毎年のラット供養に行く助手の戻るまでやや静かな部屋

かげおくり空に立つわれぼんやりと広がり消えて これは練習

放課後のブランコ揺れて揺れ止みて空を押す子をまた待つ明日

大阪の空はずつと壊れてて星の見えないことに安堵す

検証と後悔ばかり積み上げて蟻塚ほどのわれを抱きしむ

お前には尾がないからなゆらゆらと尾であやされて眠くなる夜

黒猫は海鼠のやうに転がりて寝息のたびに海を漂ふ